

“工業に立ち向かう文化”という幻想

〔「JIS批判」翼賛体制は如何にして成立したのか?〕

前田年昭（日本語の文字と組版を考える会世話人）

私の生業なりわいは組版である。電算写植やDTPでお客さまの注文どりの印刷物を世に送りだすために文字を組版した印刷版下を制作し、その労働の対価としてもらったお金で生活しているのである。いろんなお客さまが名刺から単行本、字典までいろんな印刷物を注文しにくる。

ある日のこと。仕事は、ある労働組合の手帳で後ろに小さな文字で組む資料篇がつくものだった（余談だが、この種の団体や組合の手帳に載る「日本国憲法」は文字サイズが小さいことではサラ金やローンの契約書と共通した特徴がある。なぜだろうか。電算写植では七級（一辺一・七五ミリ）が最小文字サイズである。手帳の巻末資料の字はたいいていはさらに小さい。これは、いったん十二級前後で印字した印画紙を五〇パーセント以下に縮小フィルム撮りし、オフセット印刷する方法によることが多い。資料篇で憲法や教育基本法に続けて組合規約や労働協約を組む。本文中の組合役員の名前が 溢男で、その溢のつくりの上の部分かソでもハでもなくムだというのだ。写植文字盤の三級、四級まで眺めてもそんな文字は存在しない。手書きゆえの癖字か、私の知らぬ異体字か、念のために音を示す「益」の字も併せて手元の「干禄字書」^(*)、『常用書体字典』^(*)にあたったが載っていない。さらに『誤字俗字・正字一覧表』^(*)（⁽³⁾）というさまざまな手書き字形を網羅したもので調べたが「誤字」「俗字」としてすら載っていない。ソになっている「溢」とハになっている「溢」は同じ字で包摂の範囲だ（図1参照）。包摂というのは、複数の字体を区別せずに、抽象して“同じ字”と認められる字体の範囲に存在するということである。例えばアラビア数字の4は“4”でも“4”でも4であり、ラテンアルファベットのaは“Q”でも“a”でもaである。

上がムになった「溢」は存在しない。仕事は直請けではなく中に別の業者が入っているので問い合わせると、「本人がそう言ってるからそのとおり」という。何と身勝手なと腹立ちをぐっと飲み込んで、結局、印画紙を切り貼りして「溢」を作字して納品したが、どうも後味が悪い。いくら受注産業で、しかも下請けで、お金をいただくための我慢といっても限度がある。当人はこの形で「発信」したとしても、届いた郵便などが「溢」や「溢」という字形であっても受け入れているはずで、ということは発信側しか使わないロゴやサインのごときのものである。それはそれで自由ではあるが、たとえば会社のロゴを名刺に入れて欲しいという場合は、版下を持って来ていただいてこちらでスキャナーで取り込むか、ロゴ作成のための上積み費用をいただいてこちらでトレースするか、そのどちらであっても割増料金をいただく。見出しではなく、ほとんどの人が読むはずのない手帳の資料本文で人名のロゴを字形区別することを求められても困る。発注者の組合は学校の先生たちの労働組合である。元か前か現か、いずれにしても教職についているのだろうか、教育者としてこのような「私的」ロゴマークを文字（漢字）として子どもたちに教えているのだろうか、いささか心配になってしまう。

「人の名前は本人が違う」といったら文字は絶対違う」という意見もあり、別の文字コードを用意しなければいけないのだろうか、いやはや悩ましい（いや、ほんとは腹立たしい）。しかし、文字は伝達のためにあり、文字コードは情報交換用符号ではなかったのか。

現代イタリア文学きっての鬼才、奇才であるトンマーズ・ランドルフィ（一九〇八―七九）の作品に「騒ぎ立てる言葉たち」（一九六三年）という短編がある（*4）。ある朝、歯を磨いて口をすすいだときに、口から飛び出した単語たちが意味の再配分をめぐって騒然と議論するという話である。やがて收拾がつかなくなってきた言葉たちの争いは、「私」が言葉たち全員をいったん壇詰めにしてから、「もらった意味が気に入ろうが気に入るまいが、それで我慢するんだ」と言い付け、順番に意味をもたせて釈放することによってようやく一件落着となる、という

あらずじである。

ここでは、コードは伝達のためのものという枠を超え、創造、しかも意識的な取り替えが試みられていて、それはそれで遊びなのだが、読者を楽しませてくれている。正確に伝わったかどうかという側面でのみ文字のコードをみていると抜け落ちてしまう側面があるということであり、詩や小説など、文学ではむしろ後にみるように創造という側面が生命なのではないか。

言葉のコードは伝達と創造の「対立物の統一」

「誤解のない」「コミュニケーションには共通確認されたコードが前提となる。つまり、発信者と受信者との間に雑音の入り込まない経路がつながっていて、そのうえでコミュニケーションを媒介するコードが発信者と受信者との間で同一、共通で、双方ともコードを理解し、習得していて、このコードに忠実にメッセージの作成と解読が行われるというわけだ。しかしこれはことばの伝達という側面だけしか説明していない。

私が籍を置いている会社は組版といっても日本語だけでなく漢語や朝鮮語、さらにそれらの混植組版もやっていて、関連して翻訳も業務内容の一部となっている。先日も、日本語の「いとこ」を漢語ではどう訳すかということになって、父方か母方か、男か女か、年上か年下か、と翻訳者から問い返されてたまげたことがあった。2×2×2＝8とおり、それぞれ違う単語があてられていて、日本語の「いとこ」にあたる単語はないという。私はつい、心の傷をほじくり返されたようで、めげてしまった。子どものころ伯母さんに出す手紙に叔母さんと書いて叱られ、以来親族の名称という話題は避けてきたのだった。

ヴァイスゲルバーは、キルヒホフをひきつつ、親族名称を表現する概念と単語は、言語が異なれば異なり、父、父の兄弟、父の姉妹、母、母の兄弟、母の姉妹が別の語というタイプA、父、母は別だが、父の兄弟と母の兄弟は一語、母の姉妹と父の姉妹で一語というタイプB、父と父の兄弟と母の兄弟が一語、

母と母の姉妹と父の姉妹が一語というタイプC、父と父の兄弟が一語だが母の兄弟は別語、母と母の姉妹が一語で、父の姉妹は別語というタイプD、四つの基本タイプを挙げ、母語が異なれば精神的世界像も異なることを指摘している（*5）

完璧な翻訳とは何か。太宰治の小説を英語に翻訳したときに、登場する紳士が履いている「白足袋」を「white glove（白手袋）」と訳した翻訳を名訳という話はしばしば取り上げられる。異なる文化、異なる価値観の体系のなかで、意味するところの近い単語をうまく選んだからというわけだ。しかし、「この英語の翻訳を読んだ、英語を話す共同体のメンバーは、自分たちの解釈系によって、日本語の文化のなかで起こっている、そして太宰が描いている現象を理解することになる。しかしながら、では、日本の文化、そのなかでの日本的現象としての『白足袋』の意味や価値は、この『翻訳』で伝わるであろうか」と村上陽一郎は問題を投げかけた（*6）

言語の相違は音形や記号の相違ではなく、世界観自身の相違である、とヴェルヘルム・フォン・フンボルトはいう。この立場から考えた場合、言語の相違を悪とする「常識」に囚われたままだと、「バベルの塔」の話は、驕った人類への罰としての多様な言語への分裂としか捉えられないが、しかし問い直してみても必要もあるのではないか。フンボルトを援用しつつ、レオ・ヴァイスゲルバーはこう書いている。

「言語の相違は人間の言語の才を利用し尽くし、種々な見方をして人類を言語による目標に導く多数の鍵である。言語がたった一つの場合はその独善性は避けがたいが、色々の言語があれば見方も色々で豊富になり、また元来一面的にすぎない認識を唯一可能なものと過大評価することも避けられる」（*5）

日本のロシア語名通訳として知られる米原万里はいう。「異なる言語間のコード転換ともなると、一対一の対応ではとうていとらえきれない。言語は、その担い手である民俗の……文化とか、歴史とか、風習などを背景にした独特の世界観や思考法とかを内包しているものだ」（*7）

言葉の交換は、ズレなく伝達するだけでなく、意識的にズレを造りだす場合もある。詩の場合を考えてみればわかる。また、新語がどのように生まれるかを考えてみるとわかる。

言葉のコードは、伝達と創造という対立物の統一であり、その時代、その母語の共同体の「常識」という世界像と共に生きて変化し続けているものである。

JIS漢字四十年の歴史検証が明らかにした林大らの偉業

近年、ワープロやパソコンは急速に普及し、かな漢字変換の発明とあいまって、JIS漢字コードは広く利用されるようになってきている。計算機環境で漢字を扱うためには、漢字を重複なく網羅して番号を付ける必要がある。ということとで一九七八年、JIS漢字コードは多方面の機関や企業の協力のなかで日本工業規格として生まれたものである。漢学者林古溪を父にして一九一三年生まれの、戦後の国語政策で中心的な役割を果たした林大（はやしおおひろ）が中心的な役割を果たし、膨大な資料を検討の末、制定された。JIS漢字規格にかかわっている現在の符号化文字集合調査研究委員会（JCS）は昨一九九七年の第四次規格制定にあたって、改めて初版（一九七八年）制定に関する膨大な資料を再構成し、初版制定の意図と正確さを改めて明らかにした。その内容は第四次規格に詳しいが、世上誤解されているようにJIS漢字は頻度で選ばれたのではなく、まして効率優先で選ばれたのでもない。現代日本で実際に使っている文字をすべて収録しようとしたのである。

三十年以上前、まだコンピュータで漢字そのものが使えなかった時代に手作業で、日本の地名漢字のすべてを、かつ重複なく集める労苦は並み大抵のものではなかったにちがいない。一九六九年の情報処理学会規格委員会漢字コード委員会以来の前史を含めれば四十年になるJIS漢字の歴史については芝野耕司のまとめがある（*8）。

このJIS漢字に漢和字典にない漢字が入っているとの非難もあるが、これ

いっべき騒ぎがひきおこされた。

昨年十月には、日本文藝家協会（江藤淳理事長）はJISでは「打ち出せない漢字があり、また所謂表外字についても何等字体の基準が示されていない」「国際的規格統一に際し、外国の有力私企業等の恣意によって、いわれのない字数の制限、字体の改変等を余儀なくされるおそれもなしとしません」として「今後の言語政策が誤りなく進められるよう」という要望書を国語審議会に出した。さらに今年の一月二十二日に同協会は「漢字を救え！ 文字コード問題を考えるシンポジウム」を開催、前後してマスコミ各紙はあいついで「漢字を救え」キャンペーンを繰り広げた。私の手元に収集したもので二十数紙誌、しかも奇妙なことにこれらは論旨から挙げる事例（ワープロやパソコンでは山月記が文字化けする！）まですべて同じだった。文芸評論家としてはすでに引退したかにみえた秋山駿までが狩り出され、ユニコード反対の感情論にあおられ、「文字コード国際化のワナ」と題して「父親の世代から聞いた大正時代の軍艦のこと、欧米の列強によって日本が保有する軍艦の数が制限されたこと、などを想起した。あれの再来だろうか？ 今日も同じことが繰り返されているのか」などと書く始末（*10）。かくして、政治的立場のちがいはのりこえて、一部の新左翼にいまだに人気のある秋山駿から文士を自称する右派の論客・江藤淳までが手を組んで、「漢字の危機を救え！ 大日本文学報国会」がたちまちにできてきた。

日本文藝家協会のこの精力的な動きを主導しているのが同協会電子メディア対応特別委員会（島田雅彦委員長）と文字コード問題小委員会（吉目木晴彦委員長）で、吉目木晴彦は小田原出身だとの縁で地元の『神奈川新聞』は「文字を排除したら文化滅ぶ」と題した煽情的な「社説」（*11）を載せた。かくして社会現象としての「JIS漢字批判」は、文字組版などの話題やメディア論などとともに最近の新聞や雑誌でしばしばとりあげられるテーマとなり、文字コード問題は一種のブームとなった。

JIS漢字を開発し改訂してきたJCSもJIS漢字を増やすと言って作業

中、JIS批判の旗手・文藝家協会はJIS漢字では足りないという。ならばどの字を増やすか、もう少し前向きなやり取りができそうなものではないか、と思ったのだが、どうやらこれは漢字を増やすか減らすかという「わかりやすい」対立ではなさそうだ。なぜなら孫引きされて繰り返される「JIS漢字批判」はどうやらJIS規格すら読まずになされたようだし、これを報じた大方の新聞記事も対立する双方に取材した形跡すらないようなのだ。JIS改訂作業にもかかわる池田証壽はJIS漢字をめぐるさまざまな議論について、「研究の世界では、先行研究を十分に参照して論を展開せよというのがイロハなのですが、どうも先行研究をろくに参照せずにいいたいことをいう流儀があるようです。そういうのを読むとなんとなくもやもやとして自分の仕事の能率もあがりません」(*12)という。まったくそのとおりで、誤解ならいつかは解けるし、対立するどちらが正しいかは先学につけば自ずと明らかになることであり、だがそれ自体は本稿の中心テーマではない。私の関心は、なぜ先行研究とは切り離されたところでJIS漢字批判が流行したのかの考察にある。「漢字の危機を憂える文芸家」がおおいに心を動かされ、「社会の木鐸をもって任じるジャーナリスト」がおおいに使命感に駆られた背景にはいったい何があったのだろうか。

この社会現象を「莫迦なブンシ(文士)と無智なブンヤ(新聞記者)の合作三文芝居」と断じたとしても(そのとおりだが)、何ら問題の解決にはならない。いたずらに「漢字の危機」を煽り立てるがその根拠として示される事例がみな孫引き(何万字もあるという漢字を論じるのに、なぜ「骨」や「雨月物語」「山月記」ばかり挙げられるか)というレベルのJIS漢字批判のイメージがどういふ必然性をもって論理を駆逐したのか、マスコミが横並びで宣伝を広げたのはなぜか、が社会現象として考察されねばならないのである。

宣伝をそれまでのいかなる政治的、経済的、宗教的運動さえ成しえなかった域にまで発展させたヒトラーは、「宣伝は常に大衆にだけ向けねばならない。それは常に感情に作用するように向けられねばならず」「獲得すべき大衆の数

が多くなればなるだけ、宣伝の理論的水準は低めなければならない」と教えた(*13)。ファシズムの本質を強制と規定したとしても、一時的にしる強制され騙されたのはなぜかの説明にならない。「莫迦な文士と無智なブンヤの合作三文芝居」が何ゆえに俗耳に入りやすいのか、何ゆえに左翼も右翼も含めてたやすく翼賛団体化してしまうのか。文字のコードと文化のコードにおけるボタンの掛け違いがあるのではないか。

事の本質はいわゆる国語国字問題ではない。怒涛のJES漢字批判キャンペーンに共通する論旨をみるかぎり、発信源は文藝家協会であり、その背後には、世界のあらゆる文字を扱えるようなコンピュータの枠組みをつくらうという東京大学と日本学術振興会の共同プロジェクトによるフォントセットG T明朝（東大明朝）の計画があり、さらにその背後に、無限の数の文字を取り扱うという坂村健のトロンコードの開発プロジェクトが存在するという構図が明らかになってくる。今年初めに平凡社から出た『電腦文化と漢字のゆくえ』という本(*14)は批判者たちの「綱領」を総まとめした文藝家協会のプロパガンダ本である。

結論を先取りしていえば、問題は「国語国字問題」でも「言語問題」でもなく、「技術と人間の問題」ではないか、と私は考える。

漢字の危機を呼号する阿Qたちが告白する「文芸の危機」

吉目木晴彦は、問題点は大きく二つだといっている。「第一に、収録できない文献や文書が発生していること……あるメディアにおいて特定の文字を含む文献や文書が流通上、制約を受けるといっものは異常な事態」「もう一つは、今まで印刷技術でなら当たり前にできた文字伝達ができない」(*14)

島田雅彦も「活字のようにあらゆる文字が使えるというわけではない」「ことを次のように批判している。「使えない漢字はたくさんあります……活字として一度でも使われたことがある文字というのは、それは文化の遺産のようなも

のなのだから、すべて電子テキスト化できなくてはならない。古典は、その後活字に印刷されて図書館に収められたりしているので、図書館の原則として言えば、原典を一字一句替えてはならないという大原則もあります。そうするとより完璧な文字コードというのは求められなければならない」(*15)

問題はどこにあるのか。原稿がワープロで思うように書けない、インターネット上で流通させるときに文字が化ける、電子テキスト化するときに使えない漢字がある というのだ。

しかし、書けないとっているのは原稿であって作品ではないのではないか。原稿と作品の混同についてロジェ・シャルチエ(*16)を援用しつつ鈴木一誌は「やや強引に解釈すると、書かれたものの意味は、まず原稿が書かれた段階、第二に印刷された段階、読者によって読まれた段階というように、作品は三段階にわたって意味が発生する」(*17)と指摘している。まったくそのとおりで、書かれた原稿が印刷物になるためには、デザイン・組版・印刷などによる転生、変貌を経るわけであり、小説が本として出版されるためには、原稿は編集者によって、次に組版者によって、意味が解釈され、幾度かのキャッチボールを経て、作品として、仕上げられていく。現に文字組版業者としての私の毎日、同僚からの「これ、何という字？」という問いに対する答えと、私自身が読む(解釈する)ことができない文字列について、編集者や執筆者にきいたり、字典や辞典をひいたりすることでかなり時間を費やされている。

そこには原稿のコードのやりとりが介在している。活字でも、写植でも、DTPでも条件は同じである。それゆえたとえば、ふつうはなかなか読めない作家の悪筆、癖字であっても担当の編集者や文選工は読めるということがあるのだ。原稿に書かれた文字による伝達は、話し手(発信側)と聞き手(受信側)とで共通確認されたコードに基づくメッセージを、送信しているのである。情報交換(コミュニケーション)がうまく成り立つためには、話し手と聞き手がメッセージの作成と解読のときに利用するコードが同一であることが前提である。しかし、このような理想的な条件は必ずしも満たされているとは限らない。活字

組版でも写植でもDTPでも、いわば「異なる言葉」の話し手同士である場合があり、だからこそ互いに聞き返したり、旧字体でとか特定したり、校正という「対話」を重ねるのである。

では、「漢字の危機を憂える文芸家」は何に対して不満を表明しているのだろうか。意思の交通を妨げているのは、文芸家たち発信側なのか、受信側つまり印刷会社（あるいは読者？）だといっているのだろうか。吉目木や島田の言いはそのどちらでもなく、ワープロやコンピュータが悪いといっているようである。これはずいぶんおかしなことである。

活字の場合で考えてみよう。文芸家自身が自分で活字を彫ることはまずないだろう。だから無い活字は既製の文字とはちがう「どの字か」を指定するだろう。組版と印刷の現場ではその文字がほんとうに無ければ、そして必要なものと了解しあえば、作字するだろう。ただそれだけのことである。活字にもその場でだけ彫って組んだ後、使い捨てにされるものもある。電算写植では、外字A・外字Bにコード化されているもの、モノール登録といって特定の出力機でのみのいわば外字登録するもの、冒頭のエピソードで紹介したようなもう二度と使わないものは切り貼りして使い捨て、と何段階かに分かれており、すべてがコード化されているわけではなく、もともとすべてをコードで解決しようなどというのは現実にあわない。

漢字の数は有限なのだろうか。仮名ならば重複なく網羅した文字セットとして古くから「いろは歌」などがあったが、数が有限でありえない漢字の場合はたとえば「千字文」のように一定の数で区切った文字セットとしてしか存在しなかった。世の中に実際に存在する字形は二つとして同じではないが、サイズのちがいや書体のちがいは本質ではないとして捨て去られる。包摂規準とはどこまで捨てるかという精度のことである。

吉目木晴彦をはじめとする現代の文芸家たちは、ワープロで原稿を書き、ファックスで原稿を送るようになって、要求をワープロやパソコンという「物」にぶつけるようになってしまったのだろうか。物との関係にみえるが実は人と

人の関係であり、忘れ去られてしまっているのは文芸家たちの作品を世に送り出すときの共同作業者の存在ではないだろうか。「文化はさまざまな言語の多層性から生まれる」といい、手書きだと公言する島田雅彦が、まさか文献や作品の保存をデジタルテキストの保存に矮小化しているとは思われないが、逆にテキスト至上主義から解放されているようにも思えない。文字コードをどんどん増やさないと文献のデジタル化が、すなわち文化を守ることができないとの意見に対しては、原本どおりの内容を出版するための翻刻とは解釈であり、ひとつの原本にただひとつの翻刻しかありえないかのごとき主張は狭量であること、を豊島正之の論考は明らかにしており、これはJIS漢字批判の基礎知識として必読である（*18）

田村毅は「活字の時代には印刷所に無い活字を作らせてまでも、出来る限り忠実な校訂版を作成したはずである。電子文字がないからといって校訂版の水準を下げてよいものか」（*14）という。吉目木晴彦にいたっては「不足する文字や字体があつた場合、そのつど、必要に応じて活字を作ればよく、実際に印刷会社などではそうしています」と書きながら「今まで印刷技術でなら当たり前にできた文字伝達ができない」（*14）と不満を表明する。

活版時代にできてコンピュータではできない、というこの思い込みも広く流布しているが、組版修業をコンピュータによる活字組版から始めた私などは活字印刷対コンピュータ」という世間知らずの図式には赤面させられてしまう。そこでは活字組版はたしかにコンピュータによってなされていたのだ。入力したデータは穴の開いた鑽孔テープとして射出され、キヤスター（自動鑄造機）から活字が出てくる。これを組み上げ、新聞印刷の輪転機にかける版の元になる大組をつくるのだ。

魯迅に「賢人と愚者と奴隷」（一九二五年）という短編がある。「とかく人に愚痴をこぼしたが」る奴隷は賢人から「いまにきつとよくなる」と慰められる。やがて奴隷は小屋の四方に窓もないと愚者にこぼす。愚者は泥の壁を壊しにかかる。びっくりした奴隷は主人に叱られると泣きわめき、愚者を追っ払う。

奴隷は「強盗が家を壊そうとしたので追っ払いました」と主人に告げる。褒められた奴隷は運がよくなると言ってくださったのは先見の明だったと賢人に感謝する、という話である。

「窓がない」と愚痴る民衆のなかに、魯迅は阿Qと同様の奴隷根性をみだ。「漢字がでない」と愚痴る文芸家たちには、「とかく人に愚痴をこぼしたりします。そうすれば気がすむし、またそれしかできない」(*19)という献辞をおくろう。危機に瀕しているのは漢字などではなく、書くほどの内的欲求、動機と志が失せてしまった彼らの文芸、文学そのものなのではないか。文学を救え！

なぜ日本人はかくも幼稚になったのか、「漢字を救え！」シンポジウムを司会した福田和也に聞いてみたいものである。

「専門家」として技術や知識の排他的独占を守る技術決定論者

坂村健は、「工業規格は切り捨ての思考であり、文化とは多様性である。文化規格として考える必要がある。どこかが仕切ると多様性は失われる。むしろコンピューターで登録するほうが良いのではないか」(*20)という。また、次のようにも書いている。「文字の背番号はだれが決めているかというところ、通産省の下にある工業技術院日本工業規格　いわゆるJISの委員会の人達である。文化庁ならいいというつもりはないが、日本の文化に枠をはめるようなことを『工業』技術院がやっているのである。……実は文化とコンピューターの制限の衝突。さらには、文化とコンピューターの商売との衝突なのだ」(*21)

前項で出て来た「活版対コンピューター」という図式の裏には「文化対工業」という二項対立図式が貫かれている。しかし活版もコンピューターも工業であり、文化であることは論ずるまでもない。文化観や工業観のちがいを「文化対工業」というステレオタイプにあてはめるのは、自己の文化観の提示によってJIS漢字コードに対峙するのではなく、ただ相手に「文化と対立する工業の担い手、

文化破壊者”とのレッテルを貼り、論難するためではない。しかも「どこかが仕切ると多様性は失われる。むしろコンピュータで登録するほうが良い」と語るが、そのコンピュータを扱うのは人間ではないのか、ある人間が仕切ることなく動くコンピュータというものが存在するのか、問いたい。

人間がコンピュータに向かうとき、コンピュータを客観、公正、中立なものとする幻想が生まれやすい。電腦建築家を自称する坂村健がまさかそのような幻想に囚われているとは思えないが、逆にそのような幼稚なステレオタイプ思考から解放されているようにも思えない。誤字、俗字に新たなコードを付けようとして、坂村健の主張する「登録するコンピュータ」に与えたとすると、どうなるのだろう。コンピュータの役割は、与えられた情報や命題が真か偽かの解釈だ。しかし、それはコンピュータを仕切る人間がいて意味を持つことだ。たとえば「私って嘘つきなのよ」という命題を与えられたコンピュータは無限ループのなかで死ぬ。これを自己言及パラドックスという。誤字かどうか、誤字は誤字ゆえに誤字であると定義づけを堂々巡りさせてもはじまらないし、誤字という規定付けはしないというのもひとつの考え方としてありうるかもしれない。しかし誤字は誤字であるがゆえに字義でも字体でも合意がとれないからコード化できない。一点一画のちがいもおそろかにせず、すべての文字を別コードとして、コンピュータに登録するという主張は破綻しているのである。

情報が意味を持つのは、そこに人間の目的意識(動機と志)が貫かれるからである。考えてもみようではないか。水とは何か、必要な情報を得たいという場合、水の働きと本質は、人間のどのような目的意識がそこに貫かれているかによって変わって来る。喉の渇きを癒すための飲み物としての水なのか、火事を消すための水なのか、それによって求められる情報の性質も変わって来る。求められているのはいかなるコンテキストにおける文字のコードなのか。

批判者たちに共通するのは、判断停止という甘えだ。目的や用例などのコンテキストも示せず、規準もあいまいなまま一点一画違う字は登録しろと要求する、ここには、変化しながらも「漢字の常識」として歴史を生き続けて来た豊

かな包摂の伝統に対する無理解がある。ある哲学者がどこかで「世界史の皮肉は、すべてのものをさかだちさせる」と言っていたが、どうやら漢字文化の伝統に対する一知半解の側が「漢字を救え」と言っているさかだちがある。文字コード問題がむずかしいのは、歴史のとくに長い「漢字」の世界と歴史の浅い「コンピュータ」の世界とのいずれもが文字独占階級からすれば他者を差別する格好の材料となる分野であり、文字コード問題はその両方の知識が必要になることに起因する。田中克彦が指摘しているとおり、言語は差異しか作らず、その差異を差別に転化させるのは、いつでも文字独占階級である。彼らの存在そのものが、文筆特権階級としての自己保身意識に反映する。

文芸家たちは、自分自身も書き手だということは棚に上げて、文筆特権階級としての心情を吐露している。

島田雅彦はいう。「オンラインでは誰もが書き手になれるし、意見を述べるインテリにもなれるし、言論を駆使したテロリズムに走ることもできます。その点では平等なだけけれども、その平等がもたらしたのはカオティックな言葉の“夢の島”状態ですよ。誰もがオンラインで作品を発表しているけれど、ただ目立ちたいという動機で、半ば狂気のような情熱で自分の書いたものを世界に流すことに憑かれているような気がしますね（笑）。

それが日記であれ、エッセイであれ、小説もどきであれ、オンラインでは質の悪いものが多く流通しています」（*22）

「島田……さんが、創作から印刷、配布に至るすべてをひとりでごなすがり版刷りの同人誌をオンライン上でやっているようなものとおっしゃっていました。手作業のほうにある種のノスタルジーを感じていらしたようだけれど。柳瀬 ガリ版はまともな字を書けなければできないし、技術を要しますから。パーじゃできませんよ（笑）。

加藤 技術の蓄積が必要ですからね。

島田 触覚的な労働の技術がね。

柳瀬 NIFTYの落書きなんて見てくらんなさい。アホですよ。

加藤 文化人類学的な資料になるかもしれませんが、あの情熱はいつたい何なんでしょう(笑)。

柳瀬 何でしょうね。僕はそう思ってるし、島田さんもそういう考えかどうか、バカは物をいうなという結論なんですよ。」「(*23) なお、島田は島田雅彦。柳瀬は柳瀬尚紀。加藤は加藤弘一。

この対談に見えるパー、アホ、バカの連発に文筆家としての自らの地位が脅かされることへの本能的な恐怖やヤキモチ、嫉妬を読み取ってしまうのは私だけだろうか。表現に向かいはじめた人を先ずその時点で嫌悪し、罵倒してかかる島田らの態度に、髪一筋の共感も覚えないと富田倫生が指摘しているが、私も心からそう思う。島田は、『群像』誌上で「ばか」「山下清」という言葉を投げつけた相手の町田康から「言葉に携わる仕事をもう十年以上もなさっている」「島田が「なぜそういう言葉を使ったのか」「そのようにおっしゃった存念を伺いたい」と問われ、一瞬ヒヤリとしながらも、「大江健三郎はばか」「中上はすごくばか」と意味をこっそりすり替えて言い逃れた。文字独占階級の暴力は、たいていの場合、自覚が欠如しているだけに余計に始末が悪い。こうした識字の暴力は手話言語の問題ではいっそう露骨に現われる。手話言語は、一つの言語として独自の完全な文法を備えたもう一つの言語であることは、文字独占者たちにはもうほとんど理解することができない。

莫迦にもいろいろあるが福田和也も言っている、頭のいいバカほど困ったものはない、と。

文字認識システムの本質と「精神なき専門人」

アルファベットでも書体のちがう文字を重ねてみると、人間の文字認識システムはボケ足でとらえていることがわかることを鈴木一誌が指摘している(*24)。宛先の文字が滲んでも手紙は届く。タイポグラフィはボケ足の狭い範囲内でのデザインの個性だ。しかし、日本語も戦後五十年も経つと、手書きの素養と伝

統はほとんど絶滅寸前である。筆で書いた文字は単純な線でなく、太い細いから擦れや滲みまで同じではない。筆は毛を束ねたもので、あたかも人間の筋肉の繊維構造と同じで、つまり筋肉の延長にある道具として手の動きをいっそう豊かに機能させる。どんな用字系を使う言語でも、手書きが豊かな文字文化の土台をつくってきたことは否定できない事実だ。戦前までは、筆写文字として原稿に書いた高が印刷物上で印刷文字（明朝体）として高になることは不思議でもなんでもなく、同様に吉のほづが安定がよく書きやすいからという理由で、漢代以降、吉と同字であっても筆写文字では吉が多いという、これも「漢字の常識」だったのである。

こうした伝統を破壊した客観的条件としての書の伝統の衰退を主体的に加速したのが、戦後の受験競争体制下の国語教育であり、一点一画にこだわる字形拘泥主義であった。終筆部をはねるかはねないのか、点画をつけるか離すか、常用漢字表（一九八一年）が解説でデザイン差は「字体の上からは全く問題にする必要のないもの」とし、さらに漢字表そのものを明朝体という印刷字形で示したからといって「これによって筆写の楷書における書き方の習慣を改めようとするものではない」と強調したが、教育現場では無視、とはいわないまでも軽視されている。「漢字の渡り」という「常識」はますます理解されなくなりつつある。子どもたちの成績に点数の差をつけるためにささいな違いを挙げつらう以外になかったのだとしたら、あまりにも悲しい。

某メーカーは最近、「人名専用の『俗字・異体字』フォント」を売り出したが、その宣伝文句がすさまじい。「誤字俗字も何のその！」「異体字のバリエーションもこんなに！ 渡辺の『辺』が六十五種類、斉藤の『斉』が三十一種類、佐藤の『藤』が十四種類……」というのだ。だれが何のために使うのか、人間の目的意識（動機と志）はどこへ行ってしまったのだろうか。「世界史の皮肉は、すべてのものをさかだちさせる」という哲学者の言葉はここにも生きている。まるで、「必要は発明の母」どころか、発明が次々と「必要」を生み出していつているかのようである。字が足りない、字が欲しいという出発点には確

かに実感の裏付けがあった。しかし「発明」された「六十五種類の辺」は、だがどうやって指定し、検索し、使いこなすのか？　そもそも何のために使うのだろうか？　いや、はたして本当に必要だったのだろうか？

坂村健のいう「文化の多様性」がそうであるように、他者との共生をかけた最近流行の「多言語主義」も、実はひとつの世界観で統制したい、己の秩序のなかに位置づけたい、という欲望の反映である場合が混じっているようだ。事実、他言語習得に熱心なのが軍隊だったりする。そもそも「世界のありとあらゆる文字をコンピュータに載せよう」（坂村健）という発想そのものは、昔から文字独占階級のもので特に目新しいわけではない。小宮山博史御所蔵のフランズ王立印刷所の活字見本帳（一八四五年）に集められた「世界のありとあらゆる文字」　そこには何と漢字や仮名も集められている　を見たとき、ああこの王様、世界が自分の思うがままになるといっつのはやめられないほどの魅力なんだろうなあ、と感心させられた。

坂村健や田村毅が収集した文字を前に微笑む今を遡ること約四百年前、朝鮮を侵略した豊臣秀吉の軍は活字印刷機具一式を掠奪し、技術者を強制連行、秀吉は持ち帰った李朝銅活字を天皇に献上した（一五九三年）。近世の日本における活字印刷は血まみれの歴史のなかから生まれた。こうした歴史への眼差しを欠いた輩が、文化の多様性を守れというとき、眉に唾を付けて聞く必要がある。

マックス・ヴェーバー（一八六四―一九二〇年）は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九〇五年）の結語でアメリカ人の「文化発展の最後に現われる末人たち」として「精神のない専門人、心情のない享樂人。この無_レの_レものは、人間性のかつて達したことの無い段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう」と予言した（*25）。これは現代日本にもびつたり当てはまっているではないか。

「暴君の治下の臣民は暴君よりもさらに暴である」とだれかが言っていないか。冒頭に紹介したエピソードのような字形拘泥主義がついには渡邊の邊を六十五種類にまで増やしてしまった。活字や写植でも客の無理を聞いて母型

や種字の字数を多少増やしたということもあつたようだが、コンピュータ上の電子文字は文字所有欲のパンドラの箱を開けてしまった感がある。しかし、本当にその字は必要なのか？ だれのために、何のために？ と問うてみる必要がありはしないか。ささいな字形の違いにこだわる異体字使用の主張は、視覚障害者を排除してしまう発想であることを反省する必要があるのではないかと、當山日出夫の指摘である。

DTPになってからブラックボックスの部分が増えたという。しかし、ブラックボックスにしてしまうかどうかは実は人間が決めているのである。コンピュータを前にしたときの不安や脅えという自らの感情がコンピュータをブラックボックスにしてしまうことが多いのではないか。批判者たちは、漢字の知ったかぶりやコンピュータに対する脅えの感情をすくいあげ、機械^{ラッパ}打ち^{タイ}運動ならぬJIS漢字コード批判へと誘い込んでいった。文化が「工業」や「コンピュータ」によって踏みじられていくという作り話は、目前で文化や文芸と称するものが危機に瀕しているときには真に迫って聞こえたのだ。「漢字を救え」運動はこうして凶暴化し、分析的思考は無力化され、想像力は奪われた。吉目木晴彦は先の「漢字を救え！ 文字コード問題を考えるシンポジウム」で文字コード問題の解決には「国産のOSを用意しないと環境整備が出来ない」^(*)20)と国産OS・トロンの応援演説まで先走ってしゃべってしまった。しかし日の丸OSを掲げた坂村健のトロロンがアメリカのマイクロソフトに対して勝つことができないのは、悲しいかな競争相手の「精神のない専門家」たるアメリカ人と同じ「精神のない専門家」同士の争いだからである。

坂村健の提唱する「言語指定コードによる切り替え」による多国語環境では「各言語特有の正書規則」が実現できるというが、突き詰めていくと純粋日本国語なるものが存在するかどうかのような幻想に彼らは囚われているのではないか。私の職場の中国人同僚が話す言葉は、ピジン・イングリッシュならぬ大阪弁と中国語の混淆状態だ。「北朝鮮の日本人妻」の「クツカ(國家)から援助がイッソソ(あって)生活に困ることはありません」という朝鮮語まじりの日本語など

は純粹でないからということでも正書規則が実現しにくかるう。また、新聞広告のなかの「電腦遊園地」という言葉のなかの「電腦」というのは日本語なのか、漢語なのか、どちらかに区分しなければいけないのだろうか、また区分できるのだろうか。別の階層にある文字と言語との混同という問題をさしおいたとしても、言葉が混ざりあうことがそんなにいけないことなのだろうか。近ごろ巷では中国風や台湾風、韓国風でなく純粹日本風書体を求める声が出てきているときく。ホラホラ、これが僕の骨だ。

やっぱり、なぜ日本人はかくも幼稚になったのか、シンポジウムを司会した福田和也にどうしても聞きに行く必要があるようである。

しかし歴史は進む。漢字語重視、書き言葉重視から和語重視、話し言葉重視への地殻変動はじわじわと進み、日本語に新しい風が吹き始めているのもまた事実である。日本語ラップ「DA・YO・NE」の大ヒットは三年前だったか。「ら抜き」はいけないなどという規範意識による「過保護」にもかかわらず、日本語は変わりつつある。ひょっとすると文芸家たちの「異議申し立て」は滅びゆくものへの挽歌だったのだろうか。それとも断末摩の叫びだったのだろうか。

人生、文字を知るは曖昧の始まり 魯迅の復権

魯迅は「人生、文字を知るは曖昧の始まり」という。至言である。魯迅はまた、先に引用した「賢人と愚者と奴隷」の一年後、『墓』の後に記す（一九二六年）で次のように書いた。

「古人は、書を読まなければ愚人になる、といった。それはむろん正しい。しかし、その愚人によってこそ世界は造られているので、賢人は絶対に世界を支えることはできない」（*26）

「窓がない」と愚痴る奴隷どもを横目に壁を壊した愚者（変革者）にならって、「漢字がない」と愚痴る文芸家たちを横目に私はきょうも文字組版業に励んで

いる（*27）でもねえ、何でも入れればいいという闇鍋集合文字セットと下手糞なフォントづくりには加担したくないなあ。

図1 芝野耕司編著『JIS漢字字典』一九九七年、日本規格協会刊
(略)

- 註
- *1 杉本つとむ編著『漢文入門』一九七二年、早稲田大学出版部刊、に文化十四年官板の影印・干祿字書が収録されている。干祿字書は字体研究の基本的な文献の一つである。
 - *2 伏見冲敬『常用書体字典』一九八六年、角川書店刊、は同編者、同版元の『書道大字典』のハンディ版であり、二千八百余の各親字について楷書、行書、草書、隸書、篆書の例が書道の古典である古碑帖から選んで掲げられている。こういう豊かな手書き文字の集成を見ると、三千年も生き続けてきた漢字の生命力をひしひしと感じる。編者は巻頭の解説で、「今日の教育制度では、教科書などに使われている活字体を、日常の書写にまでそのまま使わせようとしているかのようであるが、手で書くのには伝統的な書き方があり、一世代前くらいの人までは、そうした素養をうけていたものであった。しかし、今では教育者でさえこのことを知らない人がいるような時代となつてしまった」と述べているが、戦後教育に対する批判と受け取るべきであろう。
 - *3 『誤字俗字・正字一覧表』一九九五年、テイハン刊、に平成六年十一月十六日付け法務省民二第七〇〇七号法務局長、地方法務局長あて民事局長通達「氏又は名の記載に用いる文字の取扱いに関する『誤字俗字・正字一覧表』について（通達）」が収録されている。
 - *4 米川良夫・和田忠彦・柱本元彦訳『カフカの父親』一九九六年、国書刊行会刊
 - *5 レオ・ヴァイスゲルバー著、福田幸夫訳『母語の言語学』一九九四年、三元社刊、はフンボルトの先駆的な仕事を援用しつつ、人間であるためには言語を所有していなければならず、言語を所有するためには人間でなければならなかったという言葉と人間であることの深い結びつきを説いている。
 - *6 村上陽一郎『文明のなかの科学』一九九四年、青土社刊
 - *7 米原万里『不実な美女が貞淑な醜女か』一九九八年、新潮文庫
 - *8 芝野耕司「JIS漢字の歴史」一九九七年、情報規格調査会ニュースレター1997のほか*19の日本語の文字と組版を考える会第八回公開セミナー講演論文集所収、<http://jcs.a4.tufs.ac.jp/jcs/X0208/>
 - *9 芝野耕司編著『JIS漢字字典』一九九七年、日本規格協会刊、はその序文で明言されているとおり規範的立場ではなく記述的立場に貫かれ、現代日本漢字がどのように用いられているかを徹底的に調べあげ、明らかにした画期的な調査報告書である。文字コード問題の解決は、このような「もつとも単純な、もつとも普遍的な、もつとも根本的な、もつとも大衆的な、もつとも日常的な、何十億回となく繰り返し返される関係」の分析が土台にすえられなければならない、と私は考えている。
 - *10 『日本経済新聞』一九九七年十月十九日付
 - *11 『神奈川新聞』一九九八年二月十三日付「社説」、は諸紙誌に載った日本文藝家協会によるJIS批判キャンペーンをそのままなぞったものとして異色の新聞社説であったが、ものごとには常に面があるもので、文字コード問題を世間に広く知らしめたことはたいへんよいことである。なぜなら、JIS漢字コードの九七年第四次改訂、および新JIS（第三水準、第四水準）開発が膨大なボランティア作業によってになわれていること、また公開レビューというきわめて知的な方法によって支えられていること、などの事実はもつともっと広く知れ渡つてよいことだと私は確信しているが、その契機になれば「災いを転じて福となす」ことができるのではないか。
 - *12 池田証壽「『電脳文化と漢字のゆくえ』拾い読み」一九九八年、<https://member.nifty.ne.jp/shikedav/>
 - *13 ヴィリー・ミンツェンベルク、星乃治彦訳『武器としての宣伝』一九九五年、柏書房刊、はフ

イマール期にヒトラーに抗して闘った労働者文化運動の指導者であり、ドイツ・コミユニストである筆者が残した歴史的名著であり、ナチの宣伝がなぜ巨大なのかを分析し、明らかにしている。

*14 平凡社編『電脳文化と漢字のゆくえ 岐路に立つ日本語』一九九八年、平凡社刊、は「編者 平凡社」としていただいで編者の顔が見えない。しかし、収められたなかには、紀田順一郎署名の文章のようにあたかも一九七八年にJES第一水準、八三年にJES第二水準が制定されたかのような記述（事実第一、第二水準ともに一九七八年制定）が挟みこみの正誤表で訂正されるというほど基本的な事実についても驚くほど杜撰である。しかし、いや、それゆえにというべきか、本稿で対象とした「工業と立ち向かう文化」という言説を研究するためには必読の文献である。

*15 「インターネット文芸新人賞」選考委員座談会における発言、『読売新聞』（同新聞ホームページ）

*16 ロジェ・シャルチエ、福井憲彦訳『読書の文化史』一九九二年、新曜社刊

*17 『日本語の文字と組版を考える会会報』第八号、一九九八年三月、日本語の文字と組版を考える会事務局

*18 豊島正之「JES漢字批判の基礎知識」日本語の文字と組版を考える会第八回公開セミナー講演論文集所収、一九九八年、日本語の文字と組版を考える会事務局、<http://es.a.u-t.ac.jp/mtoy/>でも公開されており、後に紹介する同会事務局へ申し込めば実費で入手可能。

*19 竹内好訳『魯迅文集』第二巻一九七六年、筑摩書房刊

*20 『文藝家協会ニュース』五五八号、一九九八年二月、社団法人日本文藝家協会

*21 坂村健「漢字が出ない」『すばる』一九九八年四月号、集英社

*22 島田雅彦インタビュー『ワイアード』一九九七年四月号、同朋舎出版

*23 島田雅彦他『電脳売文党宣言』一九九六年、アスキー刊

*24 『日本語の文字と組版を考える会』第七回公開セミナー資料、一九九七年、日本語の文字と組版を考える会事務局。欧米でも筆記体で書けない人が増えていることが報告されている。たとえば、一九九六年四月三日付『日本版ニューズウィーク』にジョン・セッジウィク署名の「筆記体が絶滅の危機に パソコンが使えれば、きれいに字を書く必要などない？」という興味深い記事が掲載されている。

*25 マックス・ヴェーバー、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』一九八九年、岩波文庫。ヴェーバーの現代への問いかけに対して、山之内靖は『マックス・ヴェーバー入門』一九九七年、岩波新書、において、「テクノロジーの発展につれて普遍化する苦難」とこれに對する「受苦者としての連帯」との答えを提起している。

*26 竹内好訳『魯迅文集』第四巻、一九七七年、筑摩書房刊

*27 私組版現場では、品質第一の立場から、日本語は写研（外字A・外字Bを含む書体では約九千七百字）、漢語は北大方正（約一万四千字）、朝鮮語はアレア・ハンゲル（約一万一千字）を最大集合の文字セットとして組版業務に使用している。本文書体の選択にあたっては、府川充男の指摘するとおり、それぞれの組版システムとの関係で十分な字体数が準備されているものを選ばねば工程に無用の負荷をかけることになる。工程や効率を強調すると、またぞろ「工業に立ち向かう文化」幻想に囚われた人びとから非難をあびるかもしれないが、そういう人びとに欠落しているのは活字時代、たとえば精興社書体の書体設計師、君塚樹石のようなプロフェッショナルの仕事が持つ歴史的意義への理解であろう。作字や別書体による代用はできるだけ避けねばならず、実際に使われている字を丹念に拾い、高品質なフォントを作ることが大事だと確信するゆえんである。

* 28 なお、日本語の文字と組版を考える会は、鈴木一誌による「ページネーション・マニュアル」の提案をきっかけにして、DTPをデスクトップパブリッシングとしてだけでなく、デスクトップページネーションとして考えたい、日本語というおもとの特質に立ち返って考えたい、ということ一九九六年暮れに生まれた。デザインから編集、文字組版、製版、印刷にいたる、広くページネーションにかかわる人びとが日々ぶつかる問題をとりあげ、隔月で公開セミナーを開催し、報告書を出している。次回は「日本語の文字組版 過去・現在・未来」をテーマに六月七日に開催予定。連絡先は、（郵便番号一六一〇八二二）東京都新宿区下宮比町二一八 一〇二、フアクシミリ〇三 五二二九 八〇四七、メールアドレスHCC00672@nifty.ne.jp